



図7 原田寅之助ほか『府立大阪博物館所蔵古銭貨章牌類目録』
全一冊 (1919年)

り、その内訳は「貨幣類二二二」・「章牌類二八〇」・「未詳一三六」ということであった。この「二千六百点余」については西脇康氏は「明治十三、十四年頃大阪府立博物館が堺善蔵を経て買収した成島柳北（一八三七―一八八四）の旧収集貨幣」とされている。

当時の収蔵及び整理の状況がどのようなものであったかについて、甲賀宜政氏（大阪造幣局技師・工学博士）は前掲『所蔵品目録』の緒

言の中で次のように述べておられる。

「府立大阪博物館所蔵古銭類ハ拾八個ノ箱ニ納メ糸ヲ以テ臺板ニ括リ付ケアリテ種類ノ区別殆ンド無シ。今回之ヲ調査スルノ機會アリ。新二目録ヲ製作シタリ。然レトモ時日ノ余裕ナキ為メ両面ヲ検査セサルモノ多キヲ以テ鑑定ニ全然誤ナキヲ保シ難

シ。此等ハ未詳ノ分ト共ニ他日機會アラハ訂正スヘシ」とあり「種類の区別」や「両面の調査」が十分に行き届かなかったことを認めておられる。

そこで内容のいっそうの更新をはかって発行されたのが、大正八年（一九一九）の『府立大阪博物館所蔵古銭貨章牌類目録』である（図7）。この「目録」はさきほどの甲賀宜政氏のほか、原田寅之助氏（大阪元寶堂）や下間寅之助氏らの厚意と便宜によって「私資」を投じて世に贈り出された労作であるが、このおりの「貨幣資料」類総数は「文字五匁銀」一点と下間寅之助氏寄贈の四百六十五点の貨幣を加えて「三千九十四点」にまで充実し、その内訳も「錢貨類ノ部」二八二点、「章牌類ノ部」二八二点の「総計」三〇九四点と改められることとなった。当時の府立大阪博物館長であった山口貴雄は『目録』「はしがき」の中において「三氏の努力に成れる『古銭貨章牌類目録』は各種類を説明して餘蘊なくやがて見るも榮ある四十箇の考案新調査の函中に収められたれば、重寶の重寶たる所以の内容并に外観、茲に始めて完備したるものとや謂はんか」とこれら三氏の労を称えるところにも、その内容を賞賛している。とりわけ「材質」・「国名」・「名称」・「時代」・「摘要」の欄を設けて先の『府立大阪博物館所蔵品目録』第二巻「古銭之部」の「目録」内容を一新するとともに、『古銭貨目録』を用いて、必要とされる「貨幣資料」を随時、新装四十箱の収納資料の中から何時でも引き出せるという状況を創出したことは、原田・甲賀・下間氏らによる大きな功績のひとつであると評価してまちがい



図8 府立大阪博物場旧蔵古銭貨章牌類資料収納箱外観
(第1号・第2号箱)



図9 府立大阪博物場旧蔵古銭貨章牌類資料収納箱内装
(第3号・第4号箱)

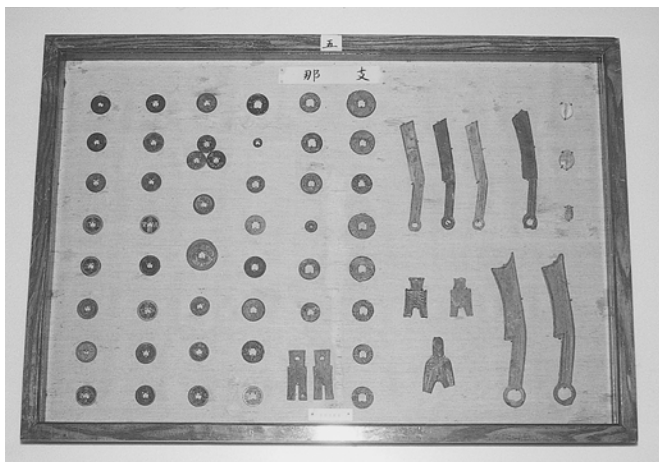


図10 支那貨幣 (第1号箱; 第5段)

ないところであろう。

(2) 「古銭貨章牌類」の内容について

続いて資料の内容についてその概要を紹介しておきたい。山口府立大阪博物場長が「見るも榮ある四十個の考案新調せる函」と述べられた収納箱は、大正六年(一九一七)に「商品陳列所」図案館に、戦後は「商工部」工業課「府立産業能率研究所」に、また昭和四十一年

(一九六六)には大阪府教育委員会社会教育課に、そして昭和五十年(一九七五)以来は文化財保護課の所管となってきたが、現在でも当初のままの姿で保管されてきたことは「戦火をくぐりぬけて平成八年(一九九七)度に大阪府指定有形文化財の歴史資料第一号として指定された「木村兼葭堂貝石標本」ともに」喜ばしい限りである。

先ず第一号箱から第四号箱(いずれの箱もおおよそ縦五十二cm×横

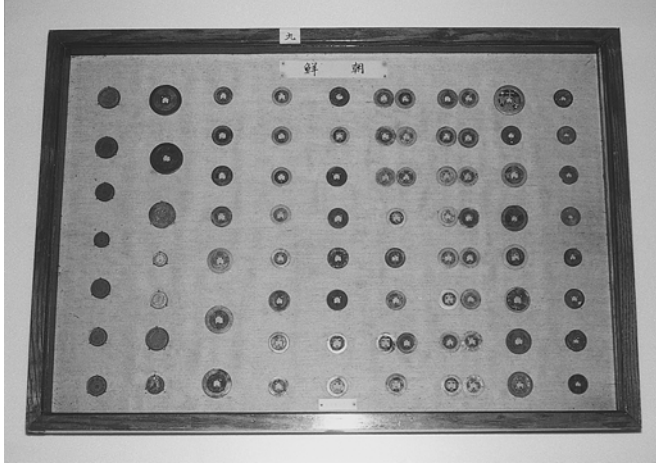


図11 朝鮮貨幣 (第1号箱; 第9段)

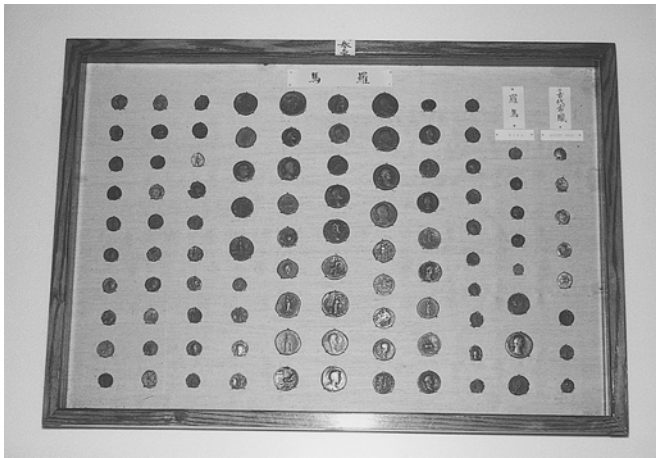


図12 古代希臘・羅馬貨幣 (第4号箱; 第1段)

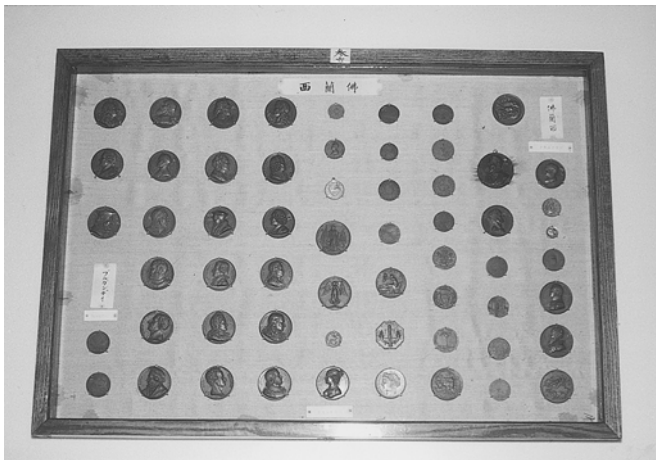


図13 佛蘭西章牌類 (第4号箱; 第6段)

七十四 cm × 高さ七十三・四 cm 前後を測る木箱である) まで大箱が全部で四箱あり(図8)、それぞれの前扉をはずすと各十段から成る収納函が現れる(図9)。したがって全体で四十の収納函から成り立っていることになるが、第一号箱の第一段から第四段には「日本」貨幣、第五段から第七段には「支那」貨幣(図10)、第八段には「支那・安南・暹羅」貨幣、第九段には「朝鮮」貨幣(図11)、第十段には「海

峽植民地・香港」貨幣などが収められている。また第二号箱には「印度」、「瓜哇」、「濠州」、「加奈陀」、「合衆国」、「ニューグランド」、「ブラジル」、「西班牙」、「英吉利」、「佛蘭西」等の貨幣が、また第三号箱には「佛蘭西」、「伊太利」、「獨逸」、「素遜」、「瑞西」、「神聖羅馬帝國」、「和蘭」、「白耳義」、「露西亞」、「丁抹」等の貨幣が収められている。そして第四号箱の第一段から第三段までは「古代希臘・羅馬」貨幣

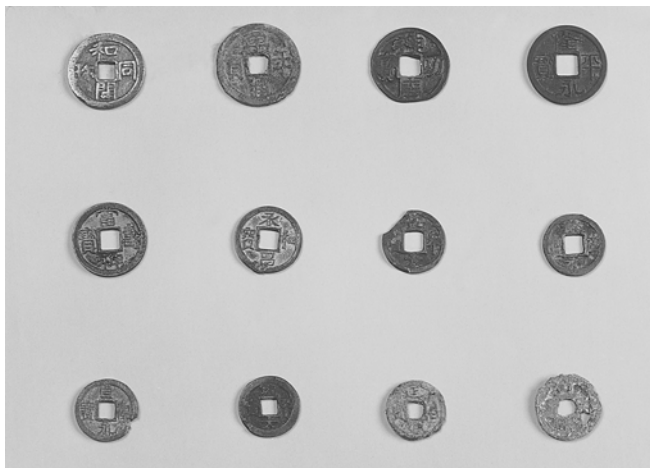


図14 皇朝十二銭（「和同開珎」は銀；他は銅）

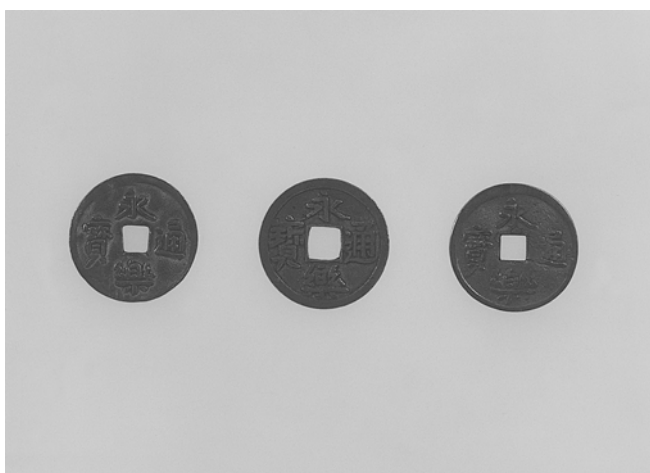


図15 永樂通寶（銀）

（図12）、そして第四号箱の第四段から第七段にかけては「日本」・「合衆国」・「墨西哥」・「伊太利」・「英吉利」・「獨逸」・「佛蘭西」・「普魯西」・「和蘭」・「露西亞」等の各国「章牌類」（図13）、そして第八段には「朝鮮」の絵銭、さらに第九段と第十段の函には「日本・朝鮮・羅馬」及び「支那」の重複品が収納されている。

平成十三年（二〇〇二）度に指定のための事前調査を大阪府文化財保護審議委員の水田紀久委員とともに行ったが、そのおりに全体的な

の代表的な資料を幾つか紹介しておきたいと思う。

まず「日本貨幣」については「和同開珎」（銀11+銅1）から「萬年通寶」・「神功開寶」・「隆平永寶」・「富壽神寶」・「承和昌寶」・「長年大寶」・「饒益神寶」・「貞觀永寶」・「寬平大寶」・「延喜通寶」を経て「元大寶」に至る一連の「皇朝十二銭」（図14）や織豊政権以後の「天正通寶」・「永樂通寶」（図15）・「慶長古銚小判金」（図16）などの金銀銭、領国貨幣としての「山口天又銀」（山口一之坂銀山支配の天野

概要をまとめたものを表1に示してある。大正八年（一九一九）に公刊された『府立大阪博物館所蔵古銭貨章牌類目録』と比較してみるとわかることであるが、八十年程の時間の経過の間に、第三号箱第六段の「神聖羅馬帝國」関連の「一ターラー貨」九点と第九段の「露西亞」関連の「ルーブル貨」が七点欠落している。したがって資料総数は三〇九四点より十六点減の三〇七八点であるというのが現状である。

詳細の内容については大正八年の『目録』や平成九年度事業として公刊した永井久美男氏との共作『府立大阪博物館旧蔵貨幣図録』第一冊（大阪府教育委員会 一九九八年）などを参照していただくことができるが、その中

| | | |
|---------------------------------|----------------------------|-------------|
| ○第1号箱 (縦52.1cm×横74.0cm×高73.4cm) | | |
| 一段：日本 | 和同開珎～元文小玉銀 | 70点 |
| 二段：日本 | 寛永通寶～文久永寶 | 64点 |
| 三段：日本 | 永樂通寶～永字駒 | 87点 |
| 四段：日本 | 寛字切銀～旗1分 | 68点 |
| 五段：支那 | 貝貨～景德元寶 | 61点 |
| 六段：支那 | 祥符元寶～船定通寶 | 80点 |
| 七段：支那 | 端平通寶～太平天国 | 74点 |
| 八段：支那ほか | 光緒元寶～永源 | 55点 |
| 九段：朝鮮 | 海東通寶～1銭 | 81点 |
| 十段：海峽植民地 | 1セント～4カバソング | 46点 |
| | <u>小計</u> | <u>686点</u> |
| ○第2号箱 (縦52.0cm×横74.2cm×高73.4cm) | | |
| 十一段：印度 | 1ルーピー～5カシ | 71点 |
| 十二段：瓜哇ほか | 1ルーピー～1ペン | 53点 |
| 十三段：漳州 | 半ペニー～バラ | 42点 |
| 十四段：加那地ほか | 半ペニー～4リアル | 59点 |
| 十五段：合衆国 | 3弗～4分の1弗 | 81点 |
| 十六段：ニューグранаダ | 2リアル～2スー | 66点 |
| 十七段：ブラジルほか | 320リーヌ～6リアルペン | 86点 |
| 十八段：西班牙ほか | 4リアル～200リーヌ | 70点 |
| 十九段：英吉利ほか | 3ペニー～52分の1シリング | 104点 |
| 二十段：佛蘭西 | ドワアル～2ソル | 101点 |
| | <u>小計</u> | <u>733点</u> |
| ○第3号箱 (縦52.1cm×横74.0cm×高73.4cm) | | |
| 二十一～二十二段：佛蘭西 | 2ソル～ドワアル | 101点 |
| 二十二段：伊太利 | 10ソルド～4ビストーロ | 84点 |
| 二十三～二十四段：獨逸 | 3分の1ターラー～4ペラー | 71点 |
| 二十四段：獨逸 | 6クロイツラー～1ペラー | 86点 |
| 二十五段：獨逸ほか | 10ソントナー～10クライツラー | 93点 |
| 二十六段：神聖羅馬帝國ほか | 4分の1クローネ～2分の1セント | 88点(※1) |
| 二十七段：和蘭 | ドワカット～6スチバール | 86点 |
| 二十八段：白耳義ほか | 5トラント～2.5ソントナー | 72点 |
| 二十九段：露西亜 | 4分の1コペーカ～2コペーカ | 75点(※2) |
| 三十段：丁扶ほか | 16スキルリソング～4分の1リアル | 93点 |
| | <u>小計</u> | <u>849点</u> |
| ○第4号箱 (縦52.1cm×横73.9cm×高73.4cm) | | |
| 三十一段：古代希臘ほか | 4分の1テタリス～テタリス | 101点 |
| 三十二段：羅馬 | テタリス～半テタリス | 131点 |
| 三十三段：羅馬 | 半テタリス～4分の1テタリス | 90点 |
| 三十四段：章牌類 | 明治16年水産博覧會勲賞～英國皇儲アルベルト殿下肖像 | 43点 |
| 三十五段：章牌類 | ソソリ4世～バストワル肖像 | 58点 |
| 三十六段：章牌類 | ホルト一侯肖像～著作家ペムボー肖像 | 59点 |
| 三十七段：章牌類 | 元勲メルカヴィジョ肖像～ラチノフ | 38点 |
| 三十八段：絵銭(朝鮮) | 萬壽無疆～帝都隆興 | 84点 |
| 三十九段：銭貨(日本朝鮮羅馬重復品) | 小玉銀～常平通寶 | 110点 |
| 四十段：古銭(支那重復品) | 貨布～嘉慶通寶 | 96点 |
| | <u>小計</u> | <u>810点</u> |

第1号箱(686点) + 第2号箱(733点) + 第3号箱(849点) + 第4号箱(810点) = 総計3078点

補) なお附 『府立大阪博物館所蔵古銭貨章牌類目録』 1冊はもともと「大阪府経済部商務課」の図書であり、「商務課之印」とともに「博第三号」の蔵書票が貼付されている。

表 1 府立大阪博物館旧蔵古銭貨章牌類資料 収納箱別分類表

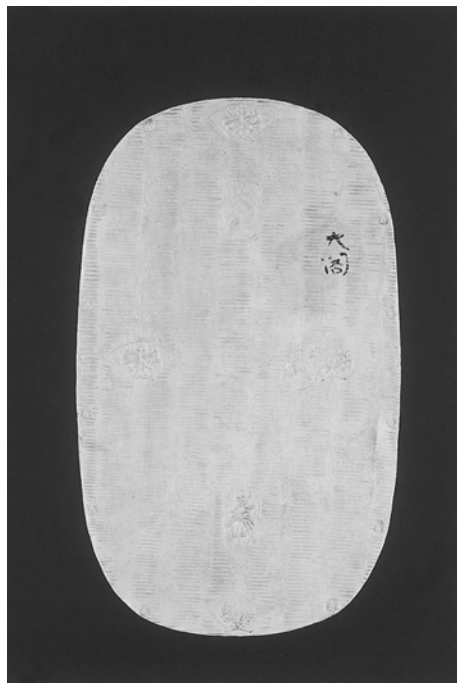


図17 「太閤大判金」(金)

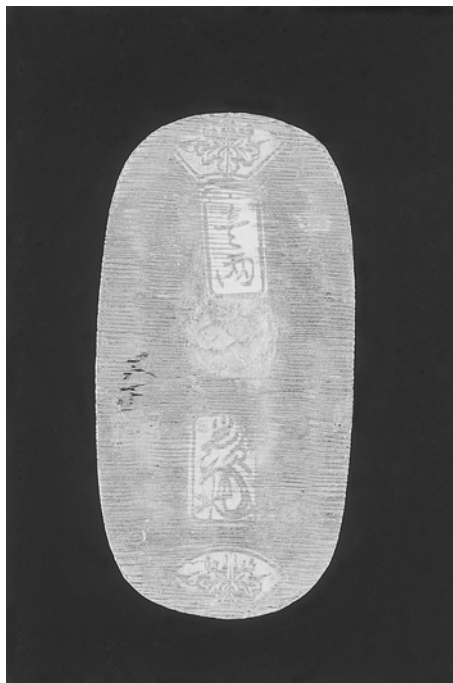


図16 慶長古鑄小判金 (金)

又右衛門にちなむ)、江戸時代に入ってから「寛永通寶」、「慶長銀」(慶長六年Ⅱ一六〇一から元禄八年Ⅱ一六九五まで凡そ一〇〇年続く)・「元禄銀」・「元文銀」・「天保銀」などの丁銀や豆板銀、「太閤大判金」(図17)・「元文小判金」・「甲州一分金」など、特に優れている。

「中国貨幣」も股周の「貝貨」をはじめ、戦国の「方足布」・「蟻鼻錢」・「方首刀」、秦・漢・三国・六朝の「半兩」・「貨泉」・「五銖」の類、隋・唐・宋の「五銖」・「開元通寶」・「宋通元寶」など、遼・金・元・明・清の「大安元寶」・「正隆元寶」・「至大通寶」・「大中通寶」・「天命通寶」を経て中華民国の「十文銅」に至るまでの一連の貨幣を歴史的に揃えており、また「朝鮮貨幣」も「東國通寶」・「朝鮮通寶」・「五文銅貨」など、高麗・朝鮮・大韓の代表的な貨幣を一通り揃えている。「安南貨幣」もその時代性は十五世紀後半以降に限定されているものの、「大和通寶」・「泰徳通寶」・「嘉隆通寶」など後醍醐朝・西山朝・阮朝の主要な貨幣を含んでいて資料的に貴重であり、価値が高い。

「章牌類」は全部で二八二点を数えるが、材質は銀・白銅・銅・黄銅・錫などである。代表的な九枚を選んでみた(図18)が、左上から「喜戯作家モリエール」(一八一六)・「文豪ヴォルテル」(一八一七)・「哲学者ルソー」(一八一七)・「作曲家グルック」(一八二二)・「宗教家カルヴィン」(一八一八)・「作曲家ハイドゥン」(一八一九)・「詩人ダンテ」(一八二二)・「哲学者ロック」(一八二二)・「ルイ十四世」(一八二三)の「肖像」である。これらのうち個別的に挙げたの



図18 章牌類（銅）文豪ヴォルテール・哲学者ロック肖像ほか

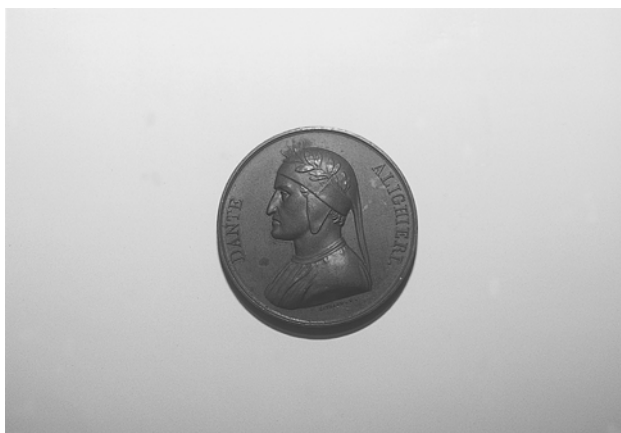


図19 詩人ダンテ肖像



図20 宗教家カルヴィン肖像



図21 哲学者ルソー肖像

が「詩人ダンテ肖像」(図19)・「宗教家カルヴィン肖像」(図20)・「哲学者ルソー肖像」(図21)であり、作者も前二者は「ゲラーレル」、第三番目は「デユボア」作であることが判明している。

蒐集品は蒐集者の美意識だけではなく、歴史意識をも写しだすと考えられるが、これらの膨大な「古銭貨章牌類資料」の総体は、当

時の「大阪府」や「府立大阪博物館」が、また「成島柳北ら知識人」が、どのように「文化」を媒体として「近代への意欲」を示そうとしていたかを如実に物語っているように思われる。ちなみに成島柳北は天保八年(一八三七)に奥儒者図書頭成島筑山の三男として江戸浅草に生まれ、安政三年(一八五六)には奥儒者として徳川家定や家茂に経学を講じたり、また慶応元年(一八六五)には騎兵頭・騎兵奉行・外国奉行・会計副総裁としての要職を歴任したことなどもある。江戸

幕府が倒れた後は、明治維新政府の招きには一切応じなかったとされているが、既に文久の頃から神田孝平や箕作秋坪らを招いて英学の研鑽に励んだり、明治五年(一八七二)から翌年(一八七三)にかけては東本願寺の大谷光瑩の欧州遊学に随行して仏・伊・英・米などを歴訪してその国際的視圏の広さを示している。明治七年(一八七四)には『朝野新聞』に招聘されて健筆をふるうとともに、『花月新誌』や『柳橋新誌』なども著している。明治十七年(一八八四)に肺患のため、四十八歳の若さで亡くなっている。

以上が「府立大阪博物館古銭貨章牌類資料」のあらましである。

四 むすびにかえて

さて本編では明治五年の「文部省博物館」や明治七年の「府立大阪博物館」の立ち上げを通して、「物産」・「古物」・「珍物」などの「実物」を通して「見聞を広く」したり「知識を進め商業を競わしめる」ことを目的とし、「官」(大阪府)「民」(成島柳北や原田寅之助・甲賀宜政・下間寅之助ら)が一体となって、明治から大正にかけて、素晴らしい協調関係を示し得た博物館実例を見ることができたのである。勿論これらの活動は、それまでの大阪を中心とする「江戸時代における貨幣学」の伝統を継承し発展させたものということができるけれども、問題はこれらきわめて秀逸な「『府立大阪博物館』旧蔵古銭貨章牌類資料」を、今後どのように活用し、次代に発展的に継承させてい

くかという点にある。「貨幣」を単に金銀趣味的に羅列するのではなく、また何かの企画展の添え物のような位置付けで展示するのではなく、「貨幣資料」そのものが本来「歴史的」にあるいは「社会経済史的」に保有してきた、あるいは映し出してきた「時代性」を明らかにするような展示、総体的には新たな視点からの「貨幣史」の展示公開が期待されてよいのではないかと考えている。とりわけ現在の世代は、バーチャル・リアリティの世界に住んでいる向きが強く、生活上の質感や量感、何が真物で何が贋物かの看破力、個別と総体との連環把握、可視的領域への識別力や不可視的領域への洞察力、思考のプロセスの重視などが全体的に稀薄になっているように見受けられるので、今後、特に親と子が一緒になって「実物資料」にふれながら「科学する」精神を養っていけるような機会を「博物館」を通して提供していくことは、先に「府立大阪博物館」が先鞭をつけた「博物館教育」の原点に立ち返ることも関連して、きわめて重要なことではないかと考えている。

なお、本編で紹介の「府立大阪博物館旧蔵古銭貨章牌類資料」一式（四箱・三千七十八点）については、平成十三年度の大阪府文化財保護審議会に諮問し、金関恕会長のもと、水田紀久・武田恒夫・田村隆照・小野山節・森口隆次・中村弘子・田端泰子委員らにより、平成十四年一月二十九日付で大阪府指定有形文化財の「歴史資料」第二号として答申・指定をされた。そしてそのおり大正八年（一九一九）に原田寅之助・甲賀宜政・下間寅之助氏らの尽力により、彼らが「私財」

をなげうって公開された貴重な目録『府立大阪博物館所蔵古銭貨章牌類目録』一冊も「附」（ついたり）指定されたことを付け加え、「古銭貨章牌類」資料の今後の益々の意義深い活用を心から願いつつ、本稿を閉じることとする。

参 考 文 献

- (1) 第五回内閣勸業博覧会協賛會編纂『大阪と博覧会』勸業博覧会協賛會、一九〇二年。
- (2) 甲賀宜政『府立大阪博物館所蔵品目録』全二卷 大阪府立博物館、一九一五年。
- (3) 山口貴雄・原田寅之助・甲賀宜政・下間寅之助『府立大阪博物館所蔵古銭貨章牌類目録』虎僊樓商店、一九一九年。
- (4) 野間光辰監修・水田紀久編集『兼葭堂日記翻刻編』中尾松泉堂、一九七二年。
- (5) 水田紀久「兼葭堂自伝」（日本隨筆大成 第14卷付録）一九七五年、再録『近世浪華学芸史談』中尾松泉堂書店、一九八六年。
- (6) 久米雅雄『木村兼葭堂貝石標本』の調査」（平成六・七年度有形文化財・無形文化財等総合調査報告書）大阪府教育委員会、一九九六年。
- (7) 浪花方圓堂『尚古之部 骨董図彙』（文化頃の写本か）（白丁文庫所蔵）。
- (8) 近藤守重『金銀図録』一八一一年。（白丁文庫所蔵）
- (9) 草間直方・瀧本誠一校閲『三貨図彙』白東社、一九三二年。
- (10) 草間直方・作道洋太郎解題『三貨図彙』文献出版、一九七八年。
- (11) 奥田操『最新世界各国貨幣』全東京印刷株式会社、一九〇〇年。
- (12) 塚本豊次郎『増訂 日本貨幣史』思文閣、一九二五年。
- (13) 三上香哉『考古学講座 貨幣』雄山閣、一九二九年。
- (14) 日本学術協会・渡辺藤吉編『日本貨幣史』日本通貨資料保存会、一九六五年。
- (15) 小葉田淳『日本の貨幣』至文堂、一九六六年。
- (16) 栄原永遠男『和同開珎の誕生』（『歴史学研究』第四一六号）、一九七五年。

- (17) 原 三正『日本古代貨幣史の研究』ポナンザ、一九七八年。
- (18) 大蔵財務協会監修・桑島和夫編『日本の貨幣―貨幣が語る時代と生活―』大阪日日新聞社、一九八三年。
- (19) 中村不折『歴代古泉百二十五譜』書道博物館、一九二五年。
- (20) 朱 活『古銭新探』齊魯書社出版、一九八四年。
- (21) 王 猷唐『泉貨與印』(『五鎰精舍印話』) 齊魯書社出版、一九八五年。
- (22) 中国錢幣学会編『中国錢幣論文集』中国金融出版社、一九八五年。
- (23) 劉巨成主編『中国古錢譜』文物出版社、一九八九年。
- (24) 久米雅雄「石才南遺跡の曆年代―貨泉による畿内第V様式土器・一世紀前半開始説への疑問―」(『石才南遺跡発掘調査報告書』大阪府埋蔵文化財協会、一九八八年。
- (25) 出土錢貨研究会『出土錢貨』創刊準備号、第六号、一九九三年、一九九六年。
- (26) 永井久美男編『近世の出土錢―論考篇―』兵庫埋蔵錢調査会、一九九七年。
- (27) 久米雅雄編『府立大阪博物館旧蔵貨幣図録』第一冊、大阪府教育委員会、一九九八年。
- (28) 瀧澤武雄・西脇康編『日本史小百科 貨幣』東京堂出版、一九九九年。